新潟県小学校
校長会報
題字…今山政三郎氏

発行所
新潟県小学校長会広報部
新潟市中央区万代1−3−30
万代シテイホテルビル3階
ＴＥＬ　025−290−2231
ＦＡＸ　025−245−6060
E-mail：nksgko@niigata-inet.or.jp
印刷所　株式会社 文久堂

不機嫌は罪である

新潟県小学校長会　副会長
小海信幸

「人間の最大の罪は、不機嫌である」とはドイツの文豪ゲーテの言葉ですが、「不機嫌の悪影響」に関する本も多く見かけます。その一つ、学校法人湘南学園長の住田昌治氏の著書「校長先生、幸せですか？」の二章「幸せな校長になろう」には、次のような記述があります。

> 「人望」のある校長になるためにはさまざまな能力が求められますが、その大前提として不可欠なのが「機嫌のよさ」です。「機嫌が悪い」というだけで、どんなに実績があり、力があっても校長としては最悪と言っても過言ではありません。（中略）不機嫌は伝染します。校長の機嫌が悪いと教頭に伝染し、教頭から職員室、職員室から教室へ不機嫌が広がってしまいます。ですから、校長が不機嫌でいることは犯罪に近いと自覚した方がいいですよ。

自分を振り返ってみると、「不機嫌」について反省した思い出があります。

私がまだ血気盛んな三十代半ば、六年の図画工作「版画」の学習で、彫り方や刷り方など、子どもに熱心にアドバイスしていたわけです。刷りのとき、版画板に乗せた紙が少しずれたことを私に指摘された女子が、私に向かって笑顔で一言、「先生、広い心をもちましょう。」と。よかれと思ったアドバイスが、実はネガティブフィードバックだったのです。きっと私がよほど不機嫌そうに見えたのでしょう。そんな私に対して、笑顔でポジティブに返してくれたその子に、自分の未熟さを教えられた思いでした。

多様化、複雑化する課題に日々取り組んでいる学校現場です。仕事をすれば、トラブルは必然的に起きるもの。その都度不機嫌になっていては、教職員や子どもたちに悪影響しか与えません。トラブル発生時こそ、「平常心」で対応することがトラブルの悪化を防ぎます。

教職員と子どもたちの笑顔のために、機嫌のいい校長でありたいものです。

全連小・関ブロ東京大会報告

大会の概要

十月十九日、二十日の両日、第七十五回全国連合小学校長会研究協議会東京大会・第七十五回関東甲信越地区小学校長研究協議会東京大会が、四年ぶりのフルスペック参集型で開催された。

大会主題及び副主題は「自ら未来を拓き　ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進～多様な人々と協働しながら新しい価値を生み出し、持続可能な社会と幸福な人生の創り手となる力を育む学校経営の推進～」である。

一日目午前の全連小七十五周年記念式典から全体会は、メイン会場である東京国際フォーラムで行われた。一日目午後の分科会は、五領域、十三分科会に分かれ、市ヶ谷、新橋、田町、京橋の各会場での分散会場方式で行われた。

一日目の記念式典では、これまで学校教育にご尽力いただいた皆様への感謝状の贈呈が行われた。新潟県からは文部科学大臣感謝状を十一名、全国連合小学校長会長感謝状を十八名の方が授与された。

午後の分科会で、私は第Ⅰ領域「学校経営」の第二分科会「組織・運営」に参加した。研究課題を「学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織づくりと学校経営」とし、「学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織」、「組織を活性化させるための具体的な方策の推進」の二つの視点から二事例についての発表と協議が行われた。

発表①では、学校経営ビジョンを実現させていくために、市内の校長会として各校が抱える課題を把握し解決策を共有したり、各校での様々な人材育成の実践を図ったりしている様子について報告があった。

発表②では、児童一人一人を輝かせる学校づくりを目指した様々な取組について報告があった。ＰＤＣＡサイクルを機能させながら、校長がしっかりとビジョンの実現を見据え、子ども、職員、地域に積極的に働き掛けている実践であった。

二日目は東京国際フォーラムに会場を戻し、「これからの時代を担う子どもたちと関わる教師のウェルビーイング」をテーマに、記念講演とシンポジウムが開催され、実り多い大会となった。

校告
研究
研報

令和四・五年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会 指定研究（教育課程）

「共創力」を高める子どもの育成

一　「共創力」とは

予測困難で変化の激しいこれからの時代を生き抜くためには、新たな知識や技能の習得に満足することなく、自ら課題を設定し、その課題解決に向けて、他者と対話しながら、新たな考えを創り出す力が必要である。当校では、それを「共創力」と定義し、全教育活動を通して育成することを目指した。

「共創力」は、教科固有の資質・能力の育成を支える力であり、対話力と情報活用力を構成要素としている。さらに、「共創力」を支える基盤にあるのが人間関係形成力と自己肯定感である。

二　「共創力」を育成するための取組

対話を通じて学びを深める授業づくりと、対話を大切にした教育活動を教育課程全般の柱に位置付け、以下の五つに取り組んでいる。

㈠　「五小授業モデル」による授業づくり

基本モデルとして「①問題意識を高める学習課題の設定、②対話を促す働き掛け、③深い学びを促す働き掛け、④振り返り」の四つの過程を設定し、各視点や要件を洗い出した。

㈡　「共創力」を支えるスキルの育成

校時表にスキルタイム（週二回・十五分）を位置付け、対話力、情報活用力、人間関係形成力等の育成を図った。

㈢　全教育活動を通した自己肯定感・人間関係形成力の育成

縦割り班による触れ合い活動等、対話に向かう心理的安全性を担保した教育活動を工夫した。

㈣　関わりや対話を重視した学校行事や各種教育活動

全体計画の策定に当たり、「共創力」を中核に位置付け、育成状況の評価欄を設け、改善を図るようにした。

㈤　家庭や地域と連携した関わりや対話の場の設定

「地域の人と考えるいじめ見逃しゼロ」、「家族触れ合い短歌」等、多様な他者と関わり、対話を促す場を工夫した。

三　今後の展望

「共創力」を高める授業づくりに関して、有効な手立てや視点・要件をさらに洗い出し、「五小授業モデル」の精度を高めていく必要がある。特に、「五小授業モデル」に基づく授業が、教科固有の資質・能力の確実な定着を促し、学力向上に結び付くことが肝要である。

校告
研究
研報

令和四・五年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会 指定研究（算数）

「いきいきと学ぶ子ども」の育成

一　本研究の方向性

上越市では、学力向上が喫緊の課題である。当校でも学力向上が重要課題となっている。この解決のためには子どもの主体性を高めることが最重要だと考える。そこで「いきいきと学ぶ子どもの育成」を研究主題とし、教師の指導技術の有効性を検証する授業づくり研究ではなく、目の前の子どもの姿（事実）を基に教師集団で対話する授業づくり研究を行った。

二　研究の方法と内容

まず、指導者一人一人が「いきいきと学ぶ子ども」の姿を具体的に描く。その姿を目指し、授業実践を重ねた。校内授業研究以外にも、月一～二回の「ＪＫ（授業改善）タイム」で互いの授業を参観する機会を設けた。実践後は、座談会（子どもたちがいきいきと学ぶ姿について自由に語る時間）やリフレクションを通して子どもの主体性について考えた。

主な研究内容は、子どもの主体性を高めるための算数科の単元構成や学習環境（課題・かかわり・追求の場）の工夫である。

三　研究から見えてきたこと

教師主導による課題解決学習ではなく、子どもが学びを選択し、仲間と共に学びを楽しむ子ども主体の協働的学習になるように授業改善した。「授業実践→座談会→振り返り」という一連の流れの中で「学ぶ意欲が子どもの内側からわき出ている姿」、「知的好奇心を高めて取り組む姿」、「納得するまで試行錯誤して自力解決する姿」など、主体的な学びの姿を様々に価値付けた。また、主体的に学ぶ姿にスポットを当てた座談会を通して、「子どもたちが分かろうとして動き出す環境づくりをすること」が、教師の重要な役目であると気付いた。教師の授業観が「上から下」ではなく「下から上」へと変わることで、子どもたちがいきいきと学ぶ姿をつくり出すことができた。

四　今後の展望

授業参観の継続により、授業改善が日常的に行われ、「いきいきと学ぶ子どもの姿」を目指すことが、「学校づくり」に直結している。「授業づくり＝研究づくり＝学校づくり」となるよう今後も主体的に学ぶ教師集団を目指す。

市町都市
郡政令指定
だよ

未来を創る子どもの育成を目指す

聖籠町小学校長会

聖籠町は、県北部の海岸地帯に位置し、新潟東港工業地帯を有する町、穀倉地帯でさくらんぼを代表とする果物一大生産地の町、さらに、マリンスポーツやサッカー等のスポーツの町として発展を続けている。

聖籠町では、一中学校、三小学校、一幼稚園で校園長会を組織し活動をしている。少数であるが故に機動力があり、俊敏に対応できる良さがあると実感している。

町の教育の理念である「未来を創る子どもの育成　～親和性・企画力・貢献意欲の向上を目指して～」の実現に向け、連携を密にして取組をしている。

一　連携の強みを生かした校園長会

聖籠町校園長会は、年間十三回の定例会を実施している。各学校園からの報告や各事業の推進等の情報交換、町への要望事項の確認等について意見交換をしている。

幼稚園、小学校、中学校と町の教育施策を具現化するための学校園間連携、そして、町教育委員会との連携も充実しており、「お互いの顔が見える」、「意志統一が図られる」強みがある。

二　学校園運営戦略会議の実施

年五回学校園運営戦略会議を行っている。各学校園長から「学校課題への対応」、「学力向上への取組」、「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の推進」等現状を報告してもらい、活発に意見交換を行っている。学校運営に関する成果や課題を共有することで、教育活動を力強く進める推進力を生み出している。

十一月開催の「聖籠町教育の日のつどい」や十二月開催の「子どもサミット」において、成果を町民に発信し、さらなる活動の充実へとつなげていく。

三　特別支援学校視察研修会の実施

特別支援教育に対する認識を深めるため、三市・北蒲原郡の校長等の視察研修で、新発田竹俣特別支援学校を訪問した。学校概要の説明後に、校内施設と生徒の作業学習等の見学をさせていただき、職業教育や自立支援について実態を深く受け止めることができた。

これからも、校園長会として連携を大切に町の教育の発展と充実に尽力していきたい。

学校紹介

地域のひと・もの・ことに包まれて育つ　上北っ子

見附市立上北谷小学校

「きれいな校舎ですね。」、「緑が多くて素敵ですね。」来校したお客様からよくいただく言葉である。

校舎は築二十年を過ぎたが、校舎内に落書きを見たことがない。子どもたちが落ち着いていて、学校を大切にしてきたからだろう。

玄関前では、「一人一樽」で育てる色とりどりの花が来校者を迎える。グラウンド脇は、小高い山になっており、斜面の木々が四季折々の姿を見せる。

当校は、見附市の南東部に位置し、長岡市栃尾地域と接する。「北谷」は、栃尾から見て北側の谷という意らしい。来年度創立百五十周年を迎える。現在児童数が二十五名と市内一の小規模校である。昭和初期には児童数五百人を超える規模であった記録が残る。

手前味噌と言われることを承知で、「地域・家庭の協力」、「落ち着いた学習環境」、「メリハリある教育課程」、「一人一人を大切にし、愛情をもって接する職員」に包まれ、「素直で一生懸命な子どもたち」が育っていると感じる。

当校の特色として、二つ紹介する。

一　全校で取り組む「循環型農園活動」

約二十年前、総合的な学習で米作り活動を導入し、昔からの米作りを地域の方から学んできた。今は全校で取り組んでいる。米作りや花栽培で出た残さを使って堆肥を作り、その堆肥で土を肥やして元気な稲や花を育てる。自然の循環サイクルを体験し、環境保護を意識させる。また、高学年が低学年に優しく教える姿や一生懸命働く姿をモデルに、思いやりや働くことのすばらしさを学び取る。六年間の継続が一層効果を高めている。

二　スキーゲレンデをもつ学校

当校は、校地脇の山にスキーゲレンデがある。私有地であるが、ご厚意で長年使わせていただいている。

距離百メートル程、斜度二十度弱、初級者には難しいが、一年生から練習し、高学年になった頃にはてっぺんから滑る子どもも現れる。自力での整地・登はんは少々きついが、学校から０分のゲレンデで、冬は雪と親しみ、体力と技術を磨く。

郷土風土記

越後闘牛「牛の角突き」の習俗

一　はじめに

現在、全国では、岩手県久慈市、新潟県小千谷市・長岡市、島根県隠岐の島町、愛媛県宇和島市、鹿児島県天城町・伊仙町・徳之島町、沖縄県うるま市の六県九地区で闘牛が行われている。越後闘牛では、「牛の角突き」と呼んでいる。そして、新潟県の闘牛だけが、国の重要無形民俗文化財の指定（昭和五十三年）を受けている。

二　「牛の角突き」の歴史

「牛の角突き」は、小千谷市東山、長岡市山古志、魚沼市広神にまたがる二十村郷で始まった習俗である。いつから始まったのかは、正確なところは不明である。六百～千年前との説もあるが、証明できるものは何もない。

江戸時代のベストセラー、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」第七輯巻之七（文政十三年・一八三〇年発刊）に、越後闘牛「牛の角突き」が「宇内（みくに）の一大奇観」として勇壮に描かれている。具体的には、八犬士の一人である犬田小文吾が二十村郷の闘牛の日、暴れ出した牛を取り押さえたというエピソードが描かれている。

南総里見八犬伝が刊行された時期からすると、確実に二百年前には、この地で「牛の角突き」が行われていたことが分かる。しかし、滝沢馬琴は牛の角突きを目の当たりにしたことはなく、「北越雪譜」の作者である鈴木牧之から送られてきた闘牛観戦記を活用したとされている。その中には、極めて詳細な闘牛場全体のスケッチも含まれており、八犬伝の挿絵にも活用されている。

「南総里見八犬伝」に描かれた越後闘牛
（監物軍治著「越後闘牛牛の角突きの習俗」より）

三　越後闘牛のルーツ

角突きの主役である闘牛には、ルーツがある。越後闘牛では、南部牛と呼ばれる岩手県産の牛が多く導入されている。

なぜ、八百キロも離れた岩手県から越後に来たのか。それは、南部の特産である南部鉄を牛の背に積み、一人の牛方が七、八頭の牛を一団として野宿しながら南下してきたからである。途中、野鍛冶や鋳物師に鉄を売り、金物の町三条市にも鉄を届けたという。牛は馬と違い、力は強いが歩みが遅い。牛方は、荷を下ろすと早く帰るために、牛を越後の地で売って帰郷したのである。南部鉄は、東北一円はもちろん、越後、信州、房総半島にまで広く運ばれ、南部牛もそれらの地域に広く分布することとなった。中でも、南部の山地と地形、気候のよく似た越後二十村郷に集中して南部牛が残ることとなった。こうして、越後に闘牛文化を遺すこととなったのである。

四　「牛の角突き」のルール

牛は、本能によって相手の牛と角をあわせて戦う。そして、技と力の限りを尽くした果てに、どちらかの牛が頭を離して逃げると勝負が付く。

しかし、越後闘牛では、岩手県の闘牛と同じで、勝ち負けを付けず、引き分けにしている。これは、両方の牛を強くさせるためである。勝負付けをして、負けてしまった牛は、やる気をなくし、次から戦わなくなってしまうからである。また、牛持ち（牛のオーナー）にとって、牛は我が子も同然であり、家族の一員として大事にされているという理由もある。

引き分けにさせる際に活躍するのが、角突きのもう一つの主役である「勢子（せこ）」と呼ばれる人たちである。一回の取組で二十～三十人の勢子が場内に入る。取組の様子を見て、ここまでだと判断した勢子長の右手が挙げられると、勢子たちが一斉に戦いの仲裁に入る。まずは、牛の後ろ足に縄を掛けて牛の動きを止める。そして、牛の弱点である鼻を取りにいく。戦いで熱くなった牛の勢いを止めるのは、まさに命がけである。

牛同士の角突きだけでなく、牛と勢子との対峙も見所であり、これが越後闘牛の魅力となっている。

五　終わりに

当校では、全国で唯一、学校牛として闘牛を飼育している。名前は、「牛太郎」である。牛太郎は、昨年度四代目を迎えることとなった。五月から十一月まで月に一回、小千谷闘牛場で開催される「牛の角突き」に子どもたちとともに毎回取組に参加している。ぜひ、皆さんのご来場を！

県小学校長会
HPへアクセス

学校経営に役立つ
情報満載